

第 3 回国際芸術・学術 (Arts & Sciences) 拠点構想研究会 (A&S 研究会)  
開催記録

日時: 2020 年 5 月 11 日 14:30-16:00  
開催方式: Zoom 会議  
出席: 26 名  
記録: 山田美香

講演者: 熊倉純子 (東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科教授)  
司会: 秋光信佳 (研究会副代表、東京大学アイソトープ総合センター教授)

国際芸術・学術拠点構想研究会メンバー (15 名)

研究会代表:

松岡俊二: 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授 (環境経済・政策学)

研究会副代表:

秋光信佳: 東京大学アイソトープ総合センター教授 (生命科学)

メンバー:

安部 良: 安部良アトリエ一級建築士事務所代表 (建築)

芥川一則: 福島高等専門学校教授・学科長・副校長 (都市経済学)

青井哲人: 明治大学理工学部教授 (建築史)

船曳 淳: 三菱総合研究所アライアンス推進室

洪 恒夫: 東京大学総合研究博物館特任教授 (空間デザイン)

松永美穂: 早稲田大学文学学術院教授 (ドイツ文学&翻訳論)

宮野 廣: 日本原子力学会・福島第一原子力発電所廃炉検討委員会・委員長 (原子力工学)

森口祐一: 東京大学大学院工学系研究科教授 (環境システム工学)

永井祐二: 早稲田大学環境総合研究センター研究院准教授 (環境工学)

中嶋聖雄: 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授 (文化社会学)

岡田久典: 早稲田大学環境総合研究センター上級研究員 (地域環境論)

小野田弘士: 早稲田大学大学院環境・エネルギー研究科教授 (環境システム工学)

山本麻紀子: 京都市立芸術大学構想設計専攻・非常勤講師 (アーティスト)

欠席 (4 名)

長谷川祐子: 東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科教授 (現代アート)

寿楽浩太: 東京電機大学工学部准教授 (科学技術社会学)

中谷礼仁: 早稲田大学理工学術院創造理工学部教授 (建築史)

坪倉正治: 福島県立医科大学特任教授 (公衆衛生学)

オブザーバー (7 名)

事務局 (4 名)

中野健太郎: 早稲田大学大学院環境エネルギー研究科

Yunhee CHOI: 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科

朱 鈺: 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科

山田美香: 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科

議題:

開会挨拶: 松岡俊二 (研究会代表、早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授)

研究会の進め方メモを用いて、今後の研究会の開催予定、レファレンスケース、復興庁・国際教育研究拠点、「中間報告」作成の基本的な考え方について、説明を行なった。また、議事録の発言者については、研究会メンバー内では発言者を記載しているが、Web 公開時には個人名は削除するというを確認した。

## 議題 1. 熊倉純子（東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科教授）

### 「地域型アートプロジェクトの可能性：共創的な芸術実践とは？」

- ・「地域アート」という呼び方はしておらず、「地域型アートプロジェクト」という概念を提唱し、事例研究や学生と共に実践をしている。
- ・本日の報告は、大型芸術祭、地域型アートプロジェクトの被災地での具体事例、その研究と課題の3部構成である。

#### まちづくりや観光としての観点：大型芸術祭を事例として

- 瀬戸内国際芸術祭
- 大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ（新潟県十日町市、津南町）
- まちづくりや観光としての可能性：芸術作品、地場産業、市民独自の取り組み（自己表現、おもてなしの精神を発揮）
- 見慣れた資源に新たな価値が付与され、住民にまちの魅力を再発見させ、まちへの愛着を抱かせるきっかけになる。
- 作品やプロジェクトの拠点がまちの新たな観光資源となり交流人口が増える。
- 外部からの注目度、シビックプライド（市民としての誇り）が高まる。

#### 地域型アートプロジェクトとは？

- 越後妻有以降、研究対象として関心が高まる
- アートプロジェクトの定義
  - ・現代美術を中心に、おもに1990年代以降日本各地で展開される共創的な芸術活動
  - ・作品展示にとどまらず、同時代の社会の中に入りこんで、個別の社会的な事象と関わりながら展開される。
  - ・既存の回路とは異なる接続/接触のきっかけとなることで、新たな芸術的/社会的文脈を創出する活動。
- アートプロジェクトの特徴
  1. 制作のプロセスを重視し、積極的に開示。
  2. プロジェクトが実施される場やその社会的状況に応じた活動を行う、社会的な文脈としてのサイト・スペシフィック（ある固有の場所に置かれる）。
  3. さまざまな波及効果を期待する、継続的な展開。
  4. さまざまな属性の人びとが関わるコラボレーションと、それを誘発するコミュニケーション。
  5. 芸術以外の社会分野への関心や働きかけ（福祉施設、学校現場、病院でアートプロジェクト開催等）。
- アートプロジェクトの現状
  - ・美術家たちが廃校・廃屋などで行う展覧会や拠点づくり、野外／まちなかでの作品展示や公演をおこなう芸術祭からコミュニティの課題を解決するための社会実験的な活動まで、幅広い形で現れるものを指すようになりつつある。また、表現形態も、現代美術に加え、ダンス、音楽、演劇など、多様さを増している。
- アートプロジェクトの可能性として—考えられる視点
  1. まちづくり・観光振興
  2. コミュニティの活性化、新たなコミュニティの形成
  3. アイデンティティの確立
  4. 他分野（教育・環境・福祉・医療など）との連携
  5. 社会包摂・共創（文化と芸術（芸術にあるモノ（結実としての作品）としての側面とコト（プロセス）としての側面＋社会包摂→社会包摂につながる芸術活動：対話の重要性）
- 東日本大震災後のプロジェクト具体例の紹介：
  - ・北澤潤（ボランティアとして被災地入りし、活動をする）：マイタウンマーケット
  - ・アサダワタル：ラジオ下神白
  - ・きむらとしろうじんじん：野点（じんじんさん・地元の方・お寺の方）、継続中

#### これらのアートプロジェクトを通して何が起きているのか？

##### (1) リミナリティとコミュニティ（ターナー提唱）をキーワードに考える研究

- もうひとつの日常とそこにおける人々
  - ・リミナリティ：日常生活の規範から逸脱し、境界状態にある人間の不確定な状況をさす言葉。道化・トリックスター・シャーマン・修行者などの位置・状況をさすのに用いる。

- ・ コミュニタス：日常的な秩序（固まっているもの）が逆転・解体した非日常的な社会状態。無礼講・カーニバルなどの祭礼や、一揆などの社会運動にみられる。不安定さを抱え、固まることのない一時的な共同社会。
- ⇒ コミュニティ：既存のものであり、固まっている。

## (2) 人々の関係を「資本」としてとらえる「社会関係資本」の概念を用いた研究

- 社会関係資本とは：

- ・ 概念の始まり：善意、友情、共感、社会的交流を基盤に蓄積される関係がコミュニティにプラスになることを指摘（ハニファン）
- ・ ネットワークが教育や雇用の機会を左右する資本（＝社会関係資本）として機能する⇒個人財（文化財として親から子へ）となる（ブルデュー）
- ・ 協調活動によって生み出される、社会の効率性を改善できる、信頼、規範（＝ルール）、ネットワークをもつ社会組織⇒集合財となる（パットナム）
- ・ 集合財としての社会関係資本：より広範なネットワーク、信頼関係、規範を築く橋渡し型社会関係資本が重要。アートの重要性が指摘される。
- ・ アートプロジェクトに見られる社会関係資本：橋渡し型社会関係資本の動きを活発にし、新たなネットワークや信頼、規範を生み出す。新たにコミュニティに入った人たちが活動に入っていく媒介となるアートプロジェクト。

## (3) まちづくりでよくいわれる理論から考えている研究

- まちづくりには、よそ者、若者、馬鹿者が必要といわれるが、アートプロジェクトで考えると、風の人（アーティスト／外からの新しい種を運ぶ人）・土の人（もともとの地元の人）・水の人（アートマネジャーなど、アーティストと伴走する人々／アーティストは、なかなか地元で理解されず根付き難いが、新しい種におもしろがって水をやる人：中にいながら、外部の視点をおもしろがって一緒に活動することを厭わない人）→水の人により、アートプロジェクトのプロセスがおもしろくなる。
- 芸術は、才能（一部の人のみ）vs 創造性（万人）→万人にある創造性を引き出すのが、アートプロジェクト。

## おわりに：アートプロジェクトの課題と魅力

課題：

- 成果や効果を実感するのに時間がかかる。
- 関わる人、水の人に負荷がかかる。
- 運営資金や人材の不足。
- 目標ありきで、社会的課題を解決しないと意味がないという観点でしか評価されないこともある。
- アートプロジェクトは、何が起こるかわかならないというところが、NPO 活動とは違う。
- 「役に立たなければ意味がない」と考えてしまうと、プロジェクトは貧しいものになってしまう。

魅力：

- 価値付けを急ぐのであればつまらないものになる。
- 「何の役に立つのか」という考え方がどれだけ人の暮らしをつまらないものしてきたことか。その発想でできてきたのが原発やシャッター商店街。何だかわからないけれども、面白いものに正直でいる。（大友良英）
- 何も役に立たないからこそアートの役割

## 質疑および議論

### 議題 2. 今後の予定について

第4回は、小野田弘士(早稲田大学大学院環境・エネルギー研究科教授)「地域エコシステムについて」(仮)の報告を予定しており、日程は調整後、事務局より連絡する。

(第4回は、2020年5月26日(火) 18:00-19:30、Zoom開催と決定しました。)

以上